

# 南国市のこわいお話



## あなたはご存知ですか？



ヒュ〜ドクドク

### (一) 血屋敷悲話

夏の夜のこわい話と言えば、「四谷怪談」やお皿を数える「番町皿屋敷」がある。姫路城に残る井戸は有名なが、私たちの住む南国市にも、皿屋敷伝説があるのをご存知だろうか？

時代は江戸のころ、藤原村に渋谷権右衛門という郷士の屋敷があり、女中奉公の娘がいた。気だてのやさしい働き者で器量良し。当主の弟、藤四郎は身分をこえて、恋心を打ち明け言いがたが、娘には好き合うた、いいなすけがあった。片想いの怒みから、家宝の皿を一枚隠して、娘にその罪をさせた。当主権右衛門は激怒して、せつかんのあげく娘を殺してしまふ。それから夜毎、草木も眠る丑満刻になると、「一枚…一枚」と数える悲しそうな声、「九枚…ああ一枚足りない」うらめしうに泣く声に、藤四郎は高熱を出し、ついには苦しみもたえ死ぬ。板屋敷には、毎朝娘の血ぞめの足型がいくら式いても消えない。当主も恐怖におののき、屋敷の西方に、九尺四方の社殿を建てて堂をなぐさめた。一尊喜神社の由来、娘の後を追った婚約者は、別の



地元の人には手厚く祭られている、春喜(春樹)神社

谷家より五畝十一歩の水田を共有田として委託され、以後、春喜神社の祭礼を行なうことになったようだ。現在に玉軒の氏子となっているが、

ともに、国分川沿いに須江の善勝寺へと急いだ。



悲しい言い伝えの残る比江山

封建の世とはいえ、恋に上下の隔てはなく、いつしか二人は、人目を忍んでは逢瀬を楽しみむ仲となった。

しかし、間もなく母親の知るところとなった。「これは、お家の一大事、しかし、二人の恋も成就させてやりたい」と思った母親は、「夜明けのうちに、物部川を渡って東にお逃げ」と路銀を渡し、このそり二人を送り出した。若い二人は、喜び勇んで東をさして道を進んだ。しかし、深窓に育った娘の足は弱く、吾岡山の北側まで来た時、夜も明けてきた。そこで後免町の郷士の家にかくまってくれるように頼んだ。郷士は、褒美欲しさに、二人を土蔵に閉じ込め、家老に注進した。早速、追っ手がやって来て、娘は連れ戻され、玄徳は、主家の娘をか



徳のお墓であると言われている。昔は、郷士を恨んだ玄徳の魂が火玉となつて、毎晩後免の郷士の家の大杉まで飛んでいた。郷士は、気味悪がって、止田に転居したが、火玉は、どこまでも追っかけていったということだ。封建時代の悲恋を秘めた、ほこらの一角は、現在、地元民の手で、美しい花壇が造られており、地藏尊には、可憐な草花と線香が供えられ、知恵を授け、子供の守り地藏として信仰されている。また、毎年八月末の日曜日には、盛大な地藏祭りも行われている。

(参考文獻、南国市史・大障村史)

### (二) 比江山哀話

後継者問題で、長宗我部元親の怒りを買った、比江山掃部介親興(通称かもん様)が、高知城内で切腹をしたとき、親興の妻子は、比江山の城内にいた。親興刺腹を知った元人は、後継のかからぬよう、家臣一同に眼をやり、二人の子どもと従者数人を

途中で土地の百姓に出会い、追っ手には知らせないでくれと頼み逃げようとしたが、まもなく追っ手が迫り、その百姓を問詰り、夫人の行方を聞き出した。追っ手は川岸の舟の中に隠れていた夫人らを捕まえて、須江の河原で切り捨てた。

この事件の後、比江山を中心に、次々に奇怪な事象が起り、親興のたたりだと言ひ伝えられた。また、夫人を祭った社のある改田から、親興の社のある比江山の間で、幾度となく火の玉が目撃され、かもん様の火として地元の老人の間で語られていた。

百五十年ほど昔、高知城下の家老福岡家に仕えていた茶坊主(おさんどん係)に玄徳という若者があつた。玄徳は、安芸郡北川の出身で二十歳、眉目秀麗、性格も良い好青年で主人からも可愛がられていた。一方、福岡家には、年のころは、十七・八、絶世の美人の娘がおつた。



封建時代の悲恋を秘めたほこら

どわかしだ罪で、討ち首になつてしまった。大涌山崎にある地蔵は、玄